

横顔
就任インタビュー

最高の医療を求める 心優しき医師であれ

茨城県の循環器医療をけん引する筑波大学の循環器内科。心不全の治療では県内最後のとりでとして、多くの命を救ってきた。2024年11月に教授に就任した石津智子氏に話を聞いた。

筑波大学医学医療系 循環器内科

い し づ と も こ

石津 智子 教授

1993年筑波大学医学専門学群卒業。筑波大学附属病院講師、加トレント総合病院、筑波大学循環器内科准教授などを経て、2024年から現職。

筑波大学医学医療系 循環器内科

茨城県つくば市天王台1-1-1 ☎029-853-3900(代表)

<https://www.md.tsukuba.ac.jp/clinical-med/cardiology/>

フロンティア精神 協力し合う文化

筑波大学の循環器内科は、1976年の同大学附属病院開院時に独立した診療科として設立され、半世紀近い歴史を持つ。開院当初は全国から医師が集まり、出身大学の垣根を越えて診療体制を構築。この「フロン

ティア精神」と「協力し合う文化」が現在も受け継がれ、教室の活発な活動につながっているという。

「臨床のなかでも、当院は特に不整脈診療に自信をもっています。不整脈学においては国内外から学びに来る医師も多く、難治性の症例にも対応可能。また、私の専門である心不全分野

では、茨城県内の最後のとりでとして高度な治療を提供しています」

循環器内科医を希望する

若手医師が全国的に減少傾向にあるなか、同院では右肩上がりに増加。これまでの実績や教室内の雰囲気さらに「屋根瓦」式の指導体制が評価されたことが要因だと分析している。

「リングに上がれ」 「評論家になるな」

未来の医療を担う人材の育成にも積極的に取り組んでおり、特に研究を重要視している。「指導方針として掲げているのは、『リングに上がれ』『評論家になるな』という言葉です。教科書で学ぶ知識だけでなく、自ら研究を行い、論文を発表することで新たな発見がありますし、医学界の発展に寄与する実感も持てるのではないのでしょうか」

この考えは自らの経験に基づくものだという。『研究は面白い』という感覚を共有したいですね。論文を書くために研究をするのではなく、得たデータや知見を、即時に臨床に生かすことで、研究の本質や面白さを実感できると思います」

さらに若手医師には、患者に対して思いやりのある「優しい医師」を目指してほしいと考えている。現在の医療では心臓病の治療に限界がある。そのなかで、患者を励まし、寄り添える医師を育成することが、自らの使命の一つだと考えているという。

教室初の女性教授 「後進の育成に力」

今後は地域連携の強化に注力していきたいと語る。「2010年から成人先天性心疾患の診療に取り組んで

います。先天的に心疾患のある方は、成人期以降も継続的に支援する必要があります。そのためには地域の医療機関との協力が欠かせません」

厚生労働省のモデル事業となっている「筑波大学附属病院茨城県脳卒中・心臓病等総合支援センター」のセンター長にも就任。茨城県の脳卒中と心臓病に関する情報の発信拠点を目指している。なかでも心不全がある患者さんを地域ぐるみで支える「県心不全地域連携(ハート連)」の取り組みには73施設が参加。「心不全緊急入院ゼロ」の目標を掲げ、連携を深めている。

医師の働き方改革も推進。生活と仕事との両立が医師としての能力を最大限に引き出すと考えている。また、女性として初めて同科の教授に就任したことについても、特別な意義を感じていると語る。

「私自身、3児の母でもあります。大変な局面も多々ありましたが、筑波大学は私に居場所を残してくれました。私が教授に就任したということは、筑波大学は多様性を尊重する組織であるというメッセージでもあると思います」

今後は、若手医師が安心して挑戦できる環境を整備していく考えだ。伝統を重んじながら、患者に最高の医療を届けるチームづくりを目指していく。